

高橋 品子さん (91) 新栄

徳島県出身の父英三さん(昭和20年、48歳で戦死)は、大正年間に道内2番目に大手だった旧糸屋銀行(本店・旭川)の歌志内支店長を務めました。自宅は、4室続きの8畳間がある縁側付きの邸宅だったそうです。

日本画を趣味とし、桃哺の雅号を持つほどの趣味人でした。掛け軸に表装した絵画が何本も大切に残っています。母チヨさん(昭和19年、46歳で逝去)との間に6人姉弟の長女として芦別で生まれ、3歳まで歌志内で育ちました。

1927(昭和2)年、同銀行が破たんして当時の拓殖銀行(旧北海道拓殖銀行)に吸収され、旭川市東鷹栖に転居。そこで青春を過ごしました。旭川市立高等女学校(同26年3月閉校)を卒業後、東鷹栖小学校で助教に。子どもたちを教える教員の仕事は充実感に満ちていました。2年間「絶対結婚なんかしない」と思っていたそうです。

しかし1943(昭和18)年、19歳の時に縁談で茂敏さん(当時23歳)と見合い。東川で営んでいた雑貨店の跡取りの嫁として嫁ぎました。「角帽にほれた



んだよ」。それほど学生帽姿がりりしい好青年でした。

茂敏さんは北海道大学を卒業し、傷病兵として帰還していました。結婚後、昭和の初めごろにしゅうとの光次さん(昭和31年、61歳で逝去)が現在の地で開いた雑貨店、高橋商店の若おかみに。

「先生になることとお店を持つこと」という2つの夢がかなったそうです。1975(昭和50)年、傷病帰還後病床がちだった茂敏さんは55歳で早逝し、代わって早朝から深夜まで身を粉にして働きました。

「あのころはみんな箱で買ってくれた。子供たち3人で配達もしてくれてね。店にないものは駅前商場(JR旭川駅前のアサヒビルの前身)まで自転車で行き入れに行っただよ」。

早朝から豆腐作りもして店自慢の味に。切り盛りの傍ら、5反(50坪)の水田で米作りし、綿羊2頭、豚1匹を飼いました。昭和30-40年代は一番良い時代だったそうです。「今も店を続けていられるのは、皆さんのおかげ」と地域に根差してきました。

「私はなにも苦労しないで大きくなったけれど、すぐにお嫁で出たので、実家ではあつちゃん(妹の敦子さん、現在旭川市東鷹栖在住)がみんなを育ててくれてねえ」とその後を託した妹の苦労ぶりが心に強く残っているよう。

俳句

盆の花孫の育てし庭の花
 迷い子の涙も止まる大花火
 ドアノブの隣りふと秋立つ気配
 伯父さんの四方山話や盆参り
 盆近し胸高鳴りて会える友
 盆燈籠ふすまに映す遠い日々
 秋立つや捨てるもの捨つ袋詰め
 きな臭き国会議事堂盆の月
 妻の留守自由不自由冷奴
 涼新た今夜もつかない隣家の灯
 ビーチボーイズ流れてわたしに夏
 文庫本一冊持って盆帰省
 夕陽さす浮き雲ごとに草ロール
 リズミカル振り子時計と夏の雨
 鰻をば食わねばならぬ土用の日
 シロップをかけて人生かき氷
 大地ごと揺るる海原麦の秋
 切花を庭に求めて盆支度



松山 蓉子
 三島 智
 若田 郁
 本田 咲
 佐々木 りえ
 山内 みゆ
 長谷川 きみゑ
 小林 ろば
 高橋 公花
 杉山 ひろのり
 保科 なほ
 徳光 吐苦
 杉山 りつ
 こばやし 星来
 横田 則子
 若田 久
 高瀬 潤
 石澤 清宏